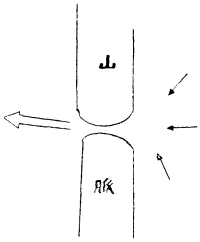
は狭くて長いので直接気流は通らないがこの場合は峡谷の長さと巾は気流が直接通過し得て，しかし強風を起し得る程度に狭さくされている．

何れにしろ暴風の強さは気圧傾度に関係し風下側に強風を受け易い広い平らな面のあること，また峡谷の構造に関係するのであるが，両者には本質的相違がある．



V字状の谷を直接気流が通過することによって強化される．谷は急で狭いほど効果的であるが巾と長さとの関係は摩擦による限度がある．

第4図　広戸風のモデル

	最強風速	継続時間	強風地域	被害の程度
清川ダシ	20 m/s 内外	数日に亘ることあり	広い	主に農作物に限る
広戸風	30 m/s 以上	数時間以内	狭い	建物にも及ぶ

とにかく本邦のような地形の複雑なところでは「清川ダシ」の場合と同様，広戸風の様な例も規模の差こそあれ各地に見られるものと思われるから，その何れに属するかは個々の例について判定する必要があるのではなかろうか．

（昭和31．9．28北陸地方気象研究会）

本文発表後大阪管区気象台から広戸風の「総合調査報告」として詳細なものが出たので文献して記した．

引用文献

(1) 「清川ダシ」風害調査報告，仙台管区気象台，秋田営林局山形県
(2) 広戸風総合調査報告　大阪管区気象台，昭 31. 11.

農作物の生育時期と気象当量(G. Azzi: Agricaltural Ecology より)

農作物の環境を知るには，たんにそれを取りまく気象なり土壌なりの物理的な性質だけを究めても，それだけで充分であるとはいえない．農作物それ自体を通してみてはじめて本当の意味の環境を知ることができる．

伊太利のアッジ (Azzi, Girolano) は上に述べたような意味での環境をは（把）握するために，農作物の生育時期 (Sub-period) と気象当量 (Meteorological Equivalent) という2つの概念を導入し，この2つを組み合わせることによって農作物の環境を現わそうと試みた．

生育時期というのは，農作物の生育期間を生物季節的に分けた時期で，その時期の間は外界に対する植物の感応度は一定であることを実証した．

気象当量というのは，おのおのの生育時期について，農作物が被害を受ける気象上の限界値をいうのである．

この2つの「めやす」からある農作物を対象とした場合，その農作物のおのおのの生育時期において，気候条件が，それぞれ気象当量を越える頻度から，農作物の環境をは握しようというのである．

アッジのこの研究は農業気象上の新分野として，現在各方面の注視を浴びている．（荒井　隆夫）

和達清夫　編　　**天気にいどむ人びと**
三一書房　1957年6月25日刊　B 6
254頁　320円

実際に気象事業にたずさわっている人々が，それぞれの違った分野で思い思いに自分の職場環境と意義について書いている．地磁気や地震観測所を除いては，ほとんど同じ内容の仕事に従事していながら，地理的位置と環境によって，その仕事に従事している人々の苦労と仕事に対する自覚の仕方が違っている．それがこの本に多彩な内容を与えている．

内容は，Ⅰ屋久島，Ⅱ室戸岬，Ⅲ定点観測船，Ⅳ鳥島，Ⅴ北海道，Ⅵ観測から予報まで，Ⅶ松代，Ⅷ女満別，Ⅸ第2回世界協同観測年の思い出，Ⅹ富士山頂，Ⅵ南氷洋捕鯨船，Ⅶ南極から帰っての12に分れ，それぞれ文字通り「天気にいどんでいる，あるいはいどんできた人々」によって書かれ，全体の実際の編集には淵秀隆氏が当られている．このように多人数で書かれた各人各様の表現を，この程度まで統一された読物にされた点について，まず敬意を表したい．この中で，定点観測船の書き方だけが違っており，読物としては難しい内容となっている．

各章ともニュアンスは違うがそれぞれ名文で，はじめから文章の上手な人々に原稿を依頼したような感じさえ受ける．ことに，藤村郁雄氏の「富士山頂」はこの本中の白眉で，日常勤務のなかに起るいろいろの出来事をたんたんと書き記していることが，かえって富士山頂勤務の苦労を読者に訴えている．それとは対蹠的であるが，読者に強く訴える文章は東島氏の「屋久島」である．

自然の猛威の中で，苦しい生活を続けている人々の記録に対して毎日新聞のこの本の評者は次のようにいっている．「……の生活記録の中には，部外者が全く想像しないようなことが多い．（中略）気象の第一線の職場は，例外なく辺地であるが，働く人々の生活環境についての考慮が欠けているようだ」といい，また「……陸上でも海上でも，人間が働くという配慮が一番あとになっている．金がないというだろうが，金より人間を尊重する精神の問題だ．タケヤリ精神は，いまの日本にも生きている」．この評を紹介して評に代えたい．（奥田穣）